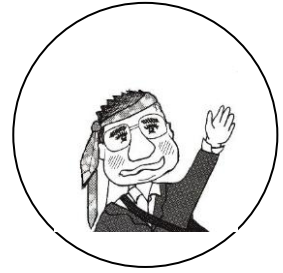


# 大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL：06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail：daimao@travelmitra.jp)

## シャクティ魂とコンテンポラリー・ダンス (1)

「コンテンポラリー」って、どういう意味？

わが輩の古い友人で市田京美という舞踊家がいる。現在フランスに住んでいるが年に一度帰国するとき会う。二十代のころ、わが輩はサラリーマンで、彼女は中学の教師をしていた。キリスト教系のSDA英語教室で出会った。京美さんは初級クラスの途中でイギリスに留学(1973年)すると言ったので、内心「大丈夫かいな・・・」と余計な心配をした。

十数年後(1989)に、ドイツの有名な「ピナ・バウシュ・プッパタール舞踊団」の日本人初の一員として凱旋することになった。インド古典舞踊は色鮮やかだが、まるで白鳥が舞うような「まっ白」な印象を受けた。これを「コンテンポラリー・ダンス」というらしい。「現代の舞踊」、前衛的な舞踊の意味である。

ただ、日本の前衛舞踊、たとえば土方巽「暗黒舞踏」、田中泯などとは全く異なる印象を受けた。とにかく、「まっ白」な白鳥が覆いかぶさるようであった。そのときに単語「コンテンポラリー」を覚えた。

「中秋の名月」には、箏曲(お琴)の演奏会に招かれる。毎年その会で京美さんと会う。今ではヨーロッパ「コンテンポラリー」の大御所で、各国各地でワークショップを開いている。

ところで、「シャクティ」って、どういう意味か知っていますか？

シャクティは、「性力」(せいりょく)と訳されている。「力」「エネルギー」を意味し、女性原理とされている。女性原理が「動」的なら、男性原理は「静」的とされている。現代のジェンダー思想かれみれば、一種の性差であるが、男性原理が「世界」に働きかけるとき、必要とされるのが女性原理(エネルギー)である。女性原理がなければ、現実世界は創出されない。

この性力には、右派と左派がある。右派は穏和な女神(ドゥルガー)を、左派は性的儀礼を行い恐ろしい姿の女神(カーリー)を崇拜する。これら両神は、表裏をなしている。現代インドは右派が主流で、左派は(秘密裡なのか)表にでてこない。1980年代では、「インド最高の導師」といわれたラジニーシ(和尚)の宗教施設で性的な儀式が行われていた。主に欧米人で、もっともらしく「性秘儀」にふけていた。どうみても、あれは「苦行」ではなく、快樂的「遊戯」であった。インド映画でキス・シーンが問題になった禁欲的な時代に、現地新聞にデカデカと欧米人女性の全裸写真が掲載された。

昨年(2025)11月2日に、シャクティという舞踊家に会ってきた。彼女の父はインド人、母は日本人である。わが輩はあえて「インド舞踊家」とはいわない。数十年前に、大阪・森ノ宮ピロテ・ホールで彼女の公演を観た。かなり後部の座席であったが、シャクティの性的エネルギーが、むんむんと伝わってきた。そのころは、インド古典舞踊普及の第二段階で、「インド舞踊が誤解される！」という古典舞踊家からの

強い批判があった。インド伝統派のわが輩もそれに同調していた。

インド古典舞踊のパイオニアは、1965年に留学した大谷紀美子、櫻井暁美の両女史である。両女史が日本で活動を開始したのは1970年代初期以降のことであった。それに先立つもう一つの流れがあった。1968年10月ヴァサントマラ印度舞踊研究所が京都・仏教大学前に開所された。ヴァサントマラは日本人で、シャクティの母親である。両女史と同じ頃、幼子のシャクティ（5歳頃）と共に渡印、カルカッタでウダイ・シャンカールの舞踊学校で学んだ。ウダイは、古典舞踊とバレエを融合した「ハイ・ダンス」を創作した革新的な舞踊家であった。また、ウダイの弟はビートルズに影響を与えたラヴィ・シャンカール（シタール奏者）である。ヴァサントは、南インドのバラタナーティヤム、東インドのオディシーなど、さまざまな流派の舞踊を習得した。シャクティは幼心にウダイの影響を受けていたと推測するが、彼女によると8歳のころに土方巽の「暗黒舞踏」を観て大きな影響を受けたと語っている。天性だろうが、かなり早熟な感性である。

ヴァサントマラ印度舞踊研究所が果たしたインド舞踊への貢献は大きかった。ぞくぞくと舞踊生がインドに渡航することになった。わが輩が接したもっとも古い舞踊生の名前を挙げておこう。田中裕見子とは、わが輩の二度目の渡印（1977）のとき、マドラスの銀行家宅で偶然に出会った。ダヤ・トミコの名前も挙げておく。ダヤとは同郷なので、わが輩は「郷土の誉」といっている。大阪外大でバラタナーティヤムを教えた。体育科目ながら、インド舞踊で単位が取得できた珍しい事例である。

ここらあたりで、シャクティ公演の感想を述べておこう。

（どぎもをぬかれた）

裸で踊るシャクティの魔力に圧倒された。わが輩の眼の老化現象、いや、わが情欲のなせる錯誤（イリュージョン）かと一瞬戸惑ったが、確かに「全裸」であった。

古い話だが、大阪駅前広場で友人と立ち話をしていた。わが輩の足元に真っ白な置物があった。寒さでうずくまる子猿のような陶器にみえた。突然その陶器が動き出して慌てた。見れば全身を白く塗った半裸の女性であった。土方巽の流れをくむ舞踏集団の踊り手であった。

シャクティのそれは、子猿の動転をはるかに越えていた。

数十年前に観たむんむんとする性的エネルギーは感じなかったが、“おどろおどろしさ”と“こわばり”に襲われた。

読者諸氏は、カーリー女神をご存知だろうか。真っ黒なやせ細った身体をもち、縮れ毛で、目を血走らせ、骸骨をつないだ首飾りをして、口から真っ赤な舌をだしている女神である。カーリーは「黒色」と「時間」の意味がある。夫のシヴァ神さえも踏みつける「恐ろしい女」である。

舞踊家シャクティは数十年を経て、豊満な肉体を脱ぎ去り、裸体のカーリー女神になってしまった、とわが輩は一瞬思った。すぐさまその妄念は消え、次に浮んだのは、あのチャームンダー老女神である。

遠藤周作の『深い河』に登場する、あのチャームンダーである。

「彼女の乳房はもう老婆のように萎びています。でもその萎びた乳房から乳を出して、並んでいる子供たちに与えています。彼女の右足はハンセン氏病のため、ただれているのがわかりますか。腹部も飢えでへこみにへこみ、しかもそこには蠍が噛みついていでしょう。彼女はそんな病苦や痛みにも耐えながらも、萎びた乳房から人間に乳を与えているのです」(P. 220)

わが輩は、突然に“こわばり”から解放され、思い知った。あれはインド古典舞踊の硬い枠ではなく、正に「シャクティ・コンテンポラリーだ！」と。

ところで、わが輩の関心事は舞踊にあるのではない。ヴァサントマラの夫チャクラワルティにある。元インド国民軍にして、京都外大教授だが、その足跡の先にあるのがガンディーであり、ヨーガである。